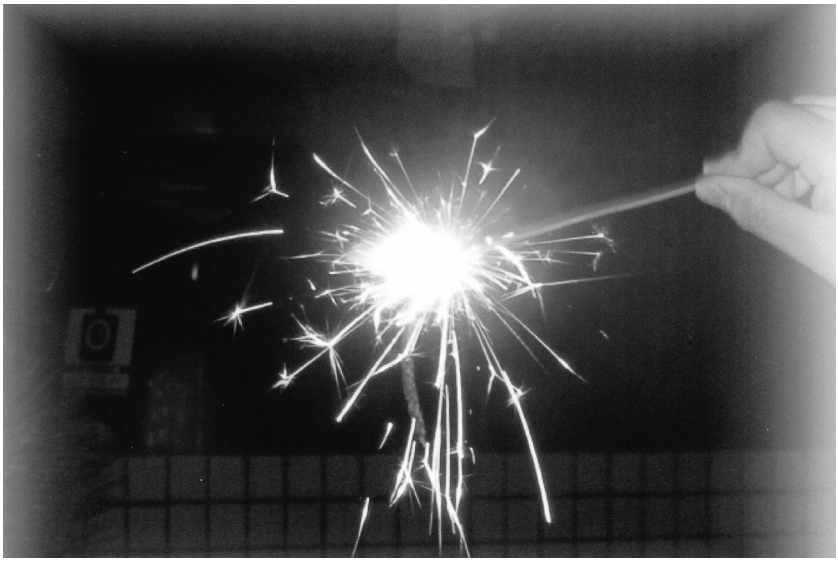
歌の周辺

少年時代を回想した歌の一つ。夏、四国の田舎の町では、日が暮れるとあちこちの家の前で少年少女が花火で遊んだ。これは少女の持つ線香花火がパチパチ爆ぜて、その少女の白い脛を照らしている場面である。明滅する明かりの中に浮かび上がる少女の肌の美しさを、私はこっそり眺めてドキドキしていた。

異性を意識しながら、あえて素知らぬふりをしていた田舎の十代の少年の、隠していた内面。それをひそやかに表現してみた。

（高野公彦）



（写真・木畑紀子）

高野公彦うた紀行・16

手花火が少女の白き脛（はぎ）てらすかなしき
夏をわれ痩せにけり

――『汽水の光』

【鑑賞】巻頭「身熱」一連四首目。直前に置かれた「夜の海荒るるを聴きてねむるなり肉熟れてゆく我といもうと」から、「少女」とは妹だろうか。思春期を迎え、手花火に照らし出された少女の無防備な脛の白さに胸を衝かれる作者。巻頭歌「少年のわが身熱（しんねつ）をかなしむにあんずの花は夜も咲（ひら）きをり」と対にして読むとき、結句「われ痩せにけり」が切なく、官能的に響く。

（藤野早苗）

一目千本桜（宮城県柴田郡大河原町）

仙台より東北本線の列車で南へ30分。桜の時期は大河原と船岡間の約700メートルで減速運転するため乗客は桜並木を楽しめる。

白石川はその昔，大高山神社付近から分かれ，ひとつは橋本方面を流れ，もうひとつは中島方面を流れて韮神山付近で合流した。二つの川が合流していたので「逢河原」と呼ばれるようになったと伝えられている。

大河原出身の実業家高山開治郎は上京し苦学力行し中央経済界にて活動し，後に東京商機新聞社長となる。大正12年4月，故郷を思い当時の殺風景な白石川の堤防に桜を植える事を思いつき，4000円（昭和8年の時価）にて桜樹1000本を町に寄贈した。

今年は〈千本桜〉が植樹されて100周年の節目。1991年以降で最も早い開花（3月27日）となり，4年ぶりの桜まつりは3月31日からとなった。白石川沿いの約1200本と船岡城址公園の約1300本の桜は3月末から見頃を迎えた。町のパンフレットには残雪の蔵王山と満開の桜が紹介されていて，このコラボは見事。

（写真・解説　川端冨起子）